



—東地中海地域ニュース—

トルコ：外相の対イスラエル国交断絶の可能性への言及

(7月5日付現地紙)

7月5日付トルコ紙報道によれば、4日、ダーヴトオウル外相は、外遊先（キルギス）からの帰途、記者に対し、ガザ支援船団事件後のイスラエルに対するトルコの立場に関して、イスラエル側の対応如何により国交断絶もあり得ると述べた。発言の概要は以下のとおり。

1. ダーヴトオウル外相発言概要

- (1) イスラエル側が謝罪しない限り、二国間関係の改善は困難である。イスラエルには3つの選択肢がある。すなわち、謝罪、あるいは国際調査委員会の設置および同委員会の報告の甘受、それから（トルコとの）国交断絶である。
- (2) このメッセージは、先週、自分がベン・エリエゼル大臣と行った会談でイスラエル側に伝えた。回答に期限はないが、永遠に待てる訳ではない。
- (3) （イスラエルの国内調査委員会の調査結果をトルコが受け入れる予知は皆無かとの質問に対し）トルコが重視しているのはイスラエルによる謝罪および賠償である。結果として謝罪がなされるなら、どの委員会の調査に基づきなされたかは重要ではなくなる。
- (4) 国連において事実調査（fact finding）委員会の設置が検討されている。トルコはその推移も見ながら今後の対応（ロードマップ）を決める。我々は修復を重視する関係者にチャンスを与えたいし、国際社会の良心が機能することを期待している。
- (5) ベン・エリエゼル大臣とは、トルコ独自の判断により、ネタニヤフ首相の特使の資格で会談した。米国の仲介はなかった。ただ、イスラエルとの会談の可能性はトロント（G20）でオバマ大統領にも伝えた。
- (6) イスラエル軍用機のトルコ領空通過禁止は、ガザ支援船団事件から1週間後に決定された。この決定には国家政府のすべての関連機関の合意がある。イスラエルの民間航空機に対する領空飛行禁止はまだ議題にないが、今後の展開如何により考慮されるだろう。我々の立場は原則に照らし、いかなる基準を当てはめても正当であり、要求が実現するまで追及する。

2. ダーヴトオウル外相の発言に関し、5日、イスラエルのリバーマン外相は「我々には謝罪するなどという考えは全くない」と一蹴した。